

『保育の研究』刊行によせて

園長 黒田 淑子

本園は、今年、創立120周年を迎え、大学における附属校園のありかたや保育界の動向とも呼応しながら、長い歴史の節目に立って、また新たな第1歩をふみだしたところである。本園の創立・発展にご尽力いただいた多くの先輩の方々に続き、今、この園にかかわっている者が、伝統を受け継ぎながら、主体的に、創造的に活動していくことが要請されているのではないかと考える。

この機にあたり、120周年を記念して、『保育の研究』が発刊される運びとなったことはまことに喜ばしいことである。日々の実践研究の成果をまとめ、発表していくことは、保育者間の人間関係を深め、それぞれの保育者が自己を磨いていくきっかけになると同時に、情報を伝え、発信していくという、附属校園に託された課題にもこたえるものである。

今、子どもをとりまく生活環境は変わってきており、少子化による人間関係の変化、生活文化の変容などにどう対処していくかが問われている。時代の変化に流されることなく、変わるものと変わらないものとをみつめて、何が大切なことなのかを究明し、まわりの変化にも、柔軟に、主体的にかかわっていく生き方が求められているのではないだろうか。

本園においては、伝統的に、子ども一人一人の主体性がはぐくまれるような保育実践が行われてきているが、この主体性を重んじる理念は保育者の姿勢にも反映されている。このことは、今回の主題である保育カンファレンスの研究内容に、また実践者それぞれの感想によくあらわれているように思われる。2年にわたる、保育カンファレンスの基盤を作り上げるまでの経過、考察は、まさに、節目に立つ本園の新たな出発にふさわしいものである。必ずしも順調とはいえないが、着実に変化・発展しているカンファレンスの経緯は、人間関係の視点に立って言えば、多様な保育者の自立と共存を可能にする相互媒介的な、柔軟な関係の構築の過程を如実に示すものであり、本文中に記載されているように、個々の主観を超えた「共有主観」ともいべき感覚を広げ、日常の保育に生きる研究の方法を確立していく道筋を提示している。

また、この『保育の研究』は、大学と附属校園の連携のありかたを考える重要な手がかりをも提起している。それは保育カンファレンスに保育学を専門とする大学の教官が参加し、研究のまとめを「実践者の立場から考える」「研究者の立場から考える」という2部構成で行っていることである。附属校園は、公教育、教員養成と共に、大学における研究実験校としての役割を担うよう期待されているが、この研究誌は、一方的な従属ではなく相互に協力しあう連携の一つの形を具現化していると言えるのではないだろうか。

『保育の研究』の発刊を契機として、本園の、実践しつつ研究を行う基盤を確立し、今後さらに、共同研究、チーム研究、個別研究、大学や他校との学際的な研究など、さまざまな研究活動を活性化していくことが望まれる。

目次

「保育の研究」刊行によせて……………	3
I. 本年度の研究について……………	5
II. 研究の内容……………	8
1. 実践者の立場から考える……………	9
[1] はじめに……………	9
[2] 方 法……………	9
[3] 経 過……………	10
[4] ま と め……………	14
2. 研究者の立場から考える……………	15
[1] 問題と目的……………	15
[2] 方 法……………	17
[3] 経 過……………	17
[4] 考 察……………	18
[5] 引用文献・参考文献……………	20
III. 実践者の感想……………	22
IV. 資 料……………	33
1. 1994年9月19日のカンファレンスの概要……………	33
2. 保育者Aの記録……………	45
3. 1995年12月1日のカンファレンスの概要……………	47
4. 1996年3月18日のカンファレンスの概要……………	51
あ と が き……………	93

I. 本年度の研究について

榎田正子

本研究は、平成6年度及び平成7年度の園内研究のまとめであり、「保育学研究」第34巻第1号P.29～P.42に掲載の論文『保育カンファレンスの検討』に加筆・修正を加えたものである。

2年前、すなわち、ここに報告する園内研究を始めるにあたり、私たちは2つのことを念頭においた。

第一は、自分たちの日々の保育実践そのものを対象とし、保育実践に直接生かされて保育の質を高めるような研究を目指すこと。第二は、国立大学附属の学校園が直面する厳しい状況を考慮し、大学と附属学校の研究面におけるよりよい連携のあり方を模索することである。

第一の点については、従来の実践研究が、保育実践のある部分だけを切り取ったり、ひとつの側面だけに焦点を当てたものであったり、研究テーマにとらわれて、かえって保育が硬いものになっているように思われるものも少なからずあることの反省で、そういう状況を打破したいと考えていた。また、保育者として取り組む研究であるから、保育者としての当事者性をそぎ落とすことなく、研究に取り上げたいと思ったのである。個々の保育者は、それぞれに実践の中で色々な悩みを抱

えている。それは、ある程度問題を対象化できるような問題意識であったり、子どものかかわりについてではあるが、具体的には表現にくいようなモヤモヤした感じであったり、またこれもあいまいな感覚ではあるが、どこか借りものの保育をしているような不安定感であったり、さまざまである。そのことをふまえ、個々の保育者の問題意識を一つ一つついでにねいに取り上げる形で園内研究会を進めることにした。その結果、回を重ねるにつれて、この研究会、すなわち保育カンファレンスの場が、予想を越えた問題を提起しながらも、他方では、各メンバーに保育者である自分自身の内面の洞察や新たな気づきをもたらし、保育実践における保育者の自由感や主体性を生み出すものとして機能していることがわかってきた。そしてこの保育カンファレンスが、私たちが希望していた保育者の必要感に根ざした研究としての可能性を含んだものであると考えることができたので、このカンファレンスの経過を検討して、保育の基盤となるものを探ることを本研究の主内容とした。

第二の点について、私たちはかねがね、保育実践を理解したうえで当事者でない視点から保育場面を検討しうる人と、実践の当事者である保育者とが、対等な立場で協力体制を組むことの重要性を考えていたところで、本研究はその考えを実現させるべく、保育学を

専門領域とする本大学教官1名と、附属幼稚園教諭8名の協力のもとに取り組んだものである。幸い本学は、大学及び大学院と、幼稚園から高等学校までの附属校園が同じ敷地内にあるという恵まれた状況にあり、本研究以外にも、教育実習その他、さまざまな連携の機会を有していることが、ここでの実践の検討や、話し合いをスムーズに進めるうえでも役立っているといえよう。しかしながら、響きとしては至極心地よい「協力」という言葉も、お互いが本当に主体的であり、対等であることをどのように生かし、研究成果として表現しうるのかということを考えると、決して単純なことではなく、たまたま置かれた好条件に依存することなく、十分な論議を重ねて、それぞれの立場の理解と歩み寄りを意識的に図ることが大切であると思われる。

二年間の継続的なカンファレンスを通して、私たち各メンバーが強く感じたことは、保育者にとって保育実践と並行して、このようなカンファレンスの場を持つことの重要性である。

私たちは、保育実践において、一人一人の子どもが十分に自己を発揮して環境とかかわり、主体的に生活をしていくことを通して、その子どもなりに一人の人間として生きていく力の基礎を培っていくことを目指しているが、そのような幼児教育を実践するうえでは、保育者自身もまた専門性を基盤としながら、その人間性を豊かに生かし、自由感を持って、その人らしくふるまえることが大切であると考えている。すなわち、子どももその子どもらしく、保育者もまたその保育者らしく、互

いに主体的にかかわるところで創造される保育を目指したいと考えている。このような視点に立つと、保育実践と並行して、保育者が互いに保育者としての自分自身に気づき、洞察を深めることのできる場があり、その場で得たものをまた実践に還元していかれるという状況が、いきいきとした保育実践を実現するうえで重要であると確認できたのである。

個々の保育者にとって、このカンファレンスの場、またはその経過がどのような意義を持ったのか、それぞれの保育実践にどのように生かされたのか、などについては、後章で詳述することであるが、今二年間の経過をまとめてみて、私たちは次のような成果を自分たちの中に認めることができる。

まず第一には、カンファレンスによって、実践と研究とが密接に結びつき、新たな保育実践を生み出すことを可能にした実践研究としての成果である。カンファレンスの場で、それぞれの実践記録を保育者自身の内面を含めて検討することができたことにより、話し合いが一般的な子ども理解論や、保育技術論に終始せず、各保育者にそれぞれの主観的な洞察を促すことが多かった。その結果、保育者は、次の日の保育に、新たな自分として、より主体的に臨むことができ、さらにその実践を、再びカンファレンスの場で検討することができるという効果的な循環が可能になったのである。

しかしながらこの状況は、簡単に得られたものではない。どんな研究会であっても、メンバーの人間性が関与するような話し合いは、多かれ少なかれ困難を伴うものであろう。特

に、幼稚園という小さい職場集団において、保育者がそれぞれの保育実践を自らの感覚や価値観などの個々の内面を含めて話し合おうとすることは、成り行きによっては、職場における人間関係にも影響するかもしれないといった不安を伴いがちで、大きな勇気を要することである。私たちも、このような壁にぶつかり、躊躇したり、気まずさを体験したことも事実である。この壁を乗り越えることができたのは、各メンバーが大きな信頼感のもとに、痛みを越えて保育の本質に向かって自らを開き、自らを問うていきたいとする意欲で一致することができたからである。

第二の成果は、カンファレンスを通して各保育者が、互いに共有しあえる部分と固有の部分とを自らの中に持ち合わせているという共通の認識を得たことにより、全メンバーがチームとしてより良く機能することに結びついたことである。すなわち、各保育者は、おそらく本園の保育者としての基本的な専門

性を共通部分として認識し、さらにその固有性も、互いの信頼感に支えられて全体の中に受け入れられていると感じることができたことで、実践においてより意欲的に自信を持って動くことが可能になったと考えられる。このことが、子どもたちの生活の場である幼稚園全体に、本園の教育理念の実践の場としての一体的な活気を生み出すことができていると思われるのである。

第三の成果は、今後への見通しと意欲である。私たちは2年間のカンファレンスを通して、保育者として取り組むにふさわしい実践研究の方向性を見つけることができたように感じている。しかし本研究は、その実践研究のようやく入り口を押さえたところである。効果的なカンファレンスを積み重ねて、実践の中から保育の本質に迫る理論を探究していくことが、今後の課題と考えているが、それに向かう意欲は大きくふくらんでいる。



少なくとも、自分の中にこれっぽちぐらいは、って思ってやったときに、うんと、自分の中にあつたなって思えたときってというのは、ものすごく気持ちが強くなるって言うか、しっかりする。

T：だから、G先生が最初苦しんでいた、なんか、ここの保育者とか、こうあらねばならないってところの…ね？

B：でも、みんなそれに縛られているっていうことを結果的には気付いて、みんなGさんと同じだったのよ。それもわかっていなかったからね。多分保育してた時、その過程を経て、あ、こんなに違ってるって過程を経て、じゃあ自分は何なのかって、こういうのに縛られないで保育している自分って何なのかって、自分なりにわかってきたら、やっぱり共通する部分はあるじゃないって。それを話しているうちに、何かみんなで、『そうなのよね』って思える部分が増えてきたっていうことなんでしょうね、今ね。だから、今度はこの共通部分が、じゃあ何なのかっていうことをみんなで探していけたらいいっていうことなんじゃないのかしらね。

C：今の段階では、だから、まだ、その共通の言葉にはむしろしたくないって言うか、主観の共有…。

D：うんうん。

C：非常に曖昧なの…。

T：難しい言葉で共同主観ぐらいにしておけば、現象学っぽくなるかもしれない。

B：でもそれが一番びったりするね、今ね。

A：現状を表している…。

B：じゃそれが何なのかって、これから考えていくしかないことだもんね。

T：でもそれって、言葉にすると、すごい陳腐ですよ、きつとね、何か。

B：でもここに至るまでに、すごい苦しみがあったし、時間的な経過とその苦しさとか、みんなあつたんだもの…。

F：言葉にすると、そう、何かあれだけでも…何となくみんなで、感覚としてはわかるっていうのが、何かそれって、子どもに出会った時にも…体感としての何か…。

B：だけど理屈ちゃんと残ってるのよ。頭の中に絶対残っているの。だから、話ができるんだから…。

E：その森上先生のおっしゃった、その、同じものを目指すっていうんじゃないってのが大きいんじゃないですか。あの、みんなが同一でなくちゃならないっていうんじゃないって言うのが…。

B：そうなの、そうなの。だけど同一の部分もあつたって、違いもあつて、同一もあつたってというのが今見えてきたのよね。

E：だから、同一であらねばならないからは、やっぱり絶対、こう、保育者は自由…やっぱりね…あの…うーん。

B：最初から同じじゃなくちゃならないってところから、こういうふうな結論は出てこないと思うから。

C：保育者である私っていうのを見てたら…。

B：うん、みんながね…みんながこういうふうに自分を見ようっていうことを重ね合わせようとする…。

(略)

あとがき

研究主任 田中 三保子

最近、幼稚園で保育の話をするとき、一人一人の保育者が輝いて見える。それぞれが、自分の考えや思いを率直に述べあい、お互いの意見を聞きあって話を進めているからだと思う。和やかに穏やかに、しかも真摯に話し合っている。2年前余を思い起こすと、ちょっと信じられない気もする光景である。

2年前、私は研究主任として、保育について本音で語り合う場としてのカンファレンスを提案したが、「はじめに」でも述べたように、その当時の私自身の問題意識はかなりはっきりしたものであった。保育についてお互いに語りあうとき、言葉づかいや抑揚など、その表現の仕方にはその人の感じ方や考え方が色濃く反映されている。表現されたものを通して、その人が意識化していないとらえ方に自分で気づき、子どもと自分との関わりを見つめ直し、そこからよりよい援助を探る必要性を感じていたからであった。しかし、当時、あらかじめそのことを理解してもらうのはひどく難しいことのように私には思われた。また、それを前提にすると、こんどはみなの中にそのことへの構えができて、率直な話し合いができにくくなるようにも思われて、あまりはっきりした説明もしないままカンファレンスを始めてしまった。

本音で語り合うことはそうたやすいことではない。お互いに本当の意味で信頼し合えていなければなおさらである。誰かが自分をさらけ出して無防備状態になってしまったときに、それを支えきれぬ自信もはっきりした見通しも、正直言って私にはなかった。おまけに、反目しあう危険性をはらみながらも、そうなっても逃げだしようがない、毎日顔を合わせざるを得ない状況の中でのスタートは、今から考えれば非常に無謀なことだったと思う。でも、とにかく何か始めなければという研究主任としての使命感だけで、未知の世界へこぎ出してしまった。こぎ出してみれば予想をはるかに超えた荒海で、行く先も見えず、舵取りもままならないままに波間に漂い、仲間に助けられ、力を合わせて、ようやく体勢が立て直せたところである。

今、私たちは率直にお互いを表現し合えるようになって、保育者としての自分に向き合い、お互いを支えあうことができるようになってきた。そしてさらに、保育者としての自分を見つめることで、自分でも気づかなかつた自分に出会えるようになってきている。それは2年前には予期しえなかつたことであり、非常に嬉しい発見である。

今後の話し合いを通じて、一人一人が自身の中にどのような自分を見いだし、それが子どもたちとの関わりにどうつながっていくかをともに考えていかれることは、私にとってとても楽しみなことである。

研究同人

- | | |
|------|--------|
| 園長 | 黒田 淑子 |
| 副園長 | 榎田 正子 |
| | 田中 三保子 |
| | 吉岡 晶子 |
| | 伊集院 理子 |
| | 上坂元 絵里 |
| | 高橋 陽子 |
| | 尾形 節子 |
| | 田中 都慈子 |
| 本学教官 | 田代 和美 |

お茶の水女子大学附属幼稚園
 保育の研究

第1巻

平成8年12月20日発行

発行 お茶の水女子大学附属幼稚園
 幼児教育研究会

〒112 東京都文京区大塚2-1-1
 TEL. 03-5978-5881
 FAX. 03-5978-5882

印刷 田畑膳写堂

〒112 東京都文京区大塚3-7-2
 TEL. 03-3941-1329